

恐怖と悪の展開
MARTIN CHUZZLEWIT に関して

佐山葉子

I

赤面から蒼白へ、蒼白から再び赤面へ、赤面から黄色に、それから冷たく、陰うつで、恐しい、汗みずくの蒼さに。その短い囁きに、これら全ての変化が、Jonas Chuzzlewitの顔に生じた。そして、ついにそばにいる第三者の耳に彼の言ったことが届きはせぬかと慄然として、彼が囁く人の口に手を当てた時、その手は死神の手と同じくらい血の気が失せ、重たかった。

(Martin Chuzzlewit, 38章)

Tigg Montagueから何かを耳打ちされたJonas Chuzzlewitの反応である。Jonasは会社のこととMontagueに文句を言おうとして、ある事を囁かれ、完全に打ちのめされてしまう。そしてMontagueの提案どおりPecksniffの許へと旅に出るのである。

これ以前のJonasはどんな人物であったか。彼はManchesterの木綿問屋、Chuzzlewit父子商会の相続人であり、厳格な金銭万能主義的教育を受けて育った。

彼が初めて綴り字と覚えた言葉は「儲け」(earn)であって、その次は、二綴りの文字に進んでから、「金」(money)であった。

(8章)

と、されている。このようにJonasを導いたのは、父Antonyであり、彼は常に息子に人を出し抜くように教えていた。彼は金銭を目標に生きてきた人であり、それを息子にも求めたのである。(9章)そして、そういう父の希望は必要以上に達せられる。つまり、

万事を財産の問題として考える若い頃からの習慣でJonasは、やがて父を勝手に動き回る権利は全くなく、普通、棺桶と呼ばれる特別の種類鉄の金庫に納められて、墓に預けられるべき、ある金額の動産である、と、じれったがりながら考えるようになった。(8章)

というわけである。

このようにJonasは成長し、結婚後も人間の愛情に何の関心も持たず、自己の利益の追求に自分のあらゆる精力を傾ける。そして、上記の引用の気持が嵩じて、自分の父を殺してしまう。彼は成長するにつれ、陰影のある人間になってゆくが、この小説の初めにおいては、それほど陰惨な人間にも思われない。彼が、Pecksniff姉妹に父はもう80才なんだ、と苛立って言っても、聞いている人には、それが意味の深い言葉とは取られていない。(11章)これは重要な伏線であるが、その時は妙に滑稽に響いたりするのである。上記の二つの引用に関しても同じことが言える。

さて、こうして辿ってみると明らかなように、Montagueの耳打ちの内容は、Jonasの父殺しとは関連のある事に違いない。Tigg Montagueの前歴は、あまりはかばかしくない。小説前半において、彼はMontague Tiggと名乗っており、Old Martinの遺産目当に群がる親戚の一人、Chevy Slymeに寄生する小悪党である。全くOld Martinとは赤の他人であるにもかかわらず、彼は親戚の人々をなだめたり、威したりしながら親族の中に巧みに入り込んでいく。

S. MarcusはTiggをDicknesの悪党の中で最も魅力ある人物の一人である。(1)と言っているが、確かにそうであろう。物語前半においては、しかし、悪党と呼ばれるほどの事をしてはいるわけではなく、小才がきいて、いささか滑稽なチンピラといったところである。それが現在は、Anglo-Bengalee Disinterested Loan and Life Assurance Companyという、曖昧な、いかかわしい臭いのする金融会社を経営する実業家になっている。しかし、本性は変わらず、詐偽師のようなものである。故に、そういうTiggがJonasをゆすってはPecksniffの金をあてにするというやり口はそれほど意外なものではない。Jonasは、Tiggを怖れて妻と共に逃げようとするが、船の出発間際にNadgett（彼はTiggの使用人であり、Jonasの秘密を彼に教えた人物である）からの手紙を読み決意を翻す。読むまでは、戦々競々としてMontagueを怖れ、破滅の真只中に落ち込んだような気持になり、怯えきって、こそこそとマントに身を包んでいたJonasが、以後、Montagueに陰険な表情（40章）を示したりするようになる。ここにJonasとMontagueの關係に第二の変化の前兆が見られる。

II

Montagueの優位が崩れる兆が見え始める。すなわちMontagueを怖れていたJonasが逆の態度に出て、自分を苦しめる存在を消し去ろうと考え始めるのである。しかし、Montagueはまだ、何の不安も感じていない。Pecksniffの許への旅の前に、JonasはMontagueの会社の同僚Dr. Joblingに尋ねる。「あなたは、こんなもので人間の喉をかき切ることができますか？」そして、二人の会話は殺人に及ぶ。Joblingが得々として語る殺人事件にJonasは非常な熱意をもって聞き入ったので、Joblingは殺人者と被害者の役を交互に

演じて見せるほど話に熱中する。言葉少なに受け答えるJonasの胸の底に邪悪な心がムクムクと広がっているのにも気づかずに。

Jobling との夕食が終り、JonasとMontagueは出発する。その時Joblingは奇しくも言う。"It will be a stormy night!"(41章)

自然界においても、JonasとMontagueが属する人間界においても、まさに嵐の夜が始った。雷鳴が轟き、稲妻が走り、雨が降りしきる嵐の夜が、Jonasが Montague を殺そうとする事件の背景となっている。それは、あたかもJonasの狂暴な意図と、それを受け止めるMontague の恐怖とが自然界に変化を与えたかのようなものである。

かぎのように曲った、非常にまばゆい稲妻が奇妙な光の幻影を示していた。そして、それは馬車の中の Montagueのびっくりしたような目の前を突然走り、すぐに見えなくなった。彼はJonasが手を持ち上げ、ピンがその手の中で、まるで彼の頭に一撃を与えることを目論んでいるかのように、ハンマーのように握りしめられているのを見たように思った。同時に彼は彼の顔の表情を見た(又はそう思った)。

荒々しい増悪と恐怖を伴った、彼が終日見せていた不自然な興奮の結合を。そして、その表情は、狼の方がずっと恐ろしくない連れであることを示していた。(42章)

このように、心理描写の説明ともなるべき自然現象の描写はDickensの常套手段であるとも言えるであろう。(cf. David Copperfieldにおける Stearforthの死の晩の海の嵐など)自然の激しい、又は不気味な状態は、そこにおいて生じる事件をより鮮明に浮びあがらせるのに成功しているからである。

Montagueの恐怖は、ムクムクと彼の心の中で頭をもたげ、遂には彼を飲み込んでしまう。彼はJonasに、「あんたは、世界中で一番良

い連れだよ」とまで言わずにいられない。自分の乗った方の秤が、Jonasの乗った方よりもはるかに軽くなっているということを、ここで初めてMontagueは悟るのである。無言のまま相手を窺いながら、Montagueの長い長い夜は終る。嵐も晴れる。その時、不幸にも馬車が転倒し、Jonasも Montagueも共に外へ放り出される。気を失ったMontagueを目前にして、自らも相当弱っていたJonasが殺意を抱いたのは言うまでもない。彼はdemonに取りつかれた如く、馬をMontagueの身体にけしかける。が、それは未然に終り、何も知らないMontagueは息を吹き返す。すでに二人の位置は逆転していた。Jonasの秘密を握って、彼を自由に操るつもりでいたMontagueはそのために自らに危険が迫っていることをひしひしと感じていた。

異常な警戒心をもって（当時は寛容の時代だと言われてきたけれども）彼の寝室を調べ、ベッドの下をのぞき込み、食器戸棚の中をのぞき、カーテンの裏側さえも調べたのちに、彼は入ってきた戸に二重鍵を掛け、寝た。（42章）

無事にPecksniffの許へ着いてからのMontagueの描写である。このように、以後、彼の描写は尊大に構えた悪徳実業家ではなく、自らよりもより大きな悪の影におびえる人間、むしろ哀れな被害者という傾向に変わってきている。180度の転換ではないまでも、Mr. Baileyに対する愛惜の念などは、以前の彼には見られなかった感情である。これまでは外側からMontagueという人間を見つめていたのに対し、以後、彼の内側から外界を見えるというように、視点も変わってきている。

一方、Jonasの方も殺人を考えながら、安閑として時を待っているわけではない。自ら強い立場に立ったことを知っている彼もまた、何かにおびえていた。Pecksniffとの契約書にサインする時、誤って赤

インクで書いてしまい、彼は狼狽して叫ぶ。

「ああ、これは一体どうしたんだ。」と彼は言った。「血まみれじゃないか。」

次の瞬間わかったことだが、彼はペンを赤インクの中につけたのだった。しかし彼は、この間違いに不思議なほどの重要性を与えた。彼は、それがどのようにしてここへ来たか、誰が持って来たか、なぜ持って来られたのかを尋ねた。そして、まず第一に、Montagueが彼をベテンにかけたのではないかと思っているかのように、彼を見つめた。別のペンと正しいインクを使った時でさえも、彼は文字がまた赤く変色するのではないかと半ば信じているように、別の紙に走り書きをしてみた。

(4 4 章)

初めMontagueを疑い、それから得体の知れない超自然の力を恐れ始める。この時からJonasに犯罪の露見に対する以外の恐れが生じるのである。

このようにして、MontagueとJonasはあたかも対称的であるかのようにバランスを保ちながら、性格の副を広め、深めていく。

Ⅲ

Jonasは一人だけ先に辞して家に帰る。そして妻に決して起すな、と言い置いて閉じ籠った自室から、Montagueを殺そうという目的を持って影のように忍び出る。途中の馬車の中での悪夢からさめた時、彼は殺人を犯すために自分はやってきているのだということを、はっきりと悟る。

一方、MontagueはPecksniffに送られて賑やかにやって来る。しかし、彼と別れて全く一人になると、Montagueの様子はガラリ

と変り、まるで10才も年取ったかのように老い込み、放心してしまふ。彼はなぜか自分の計画が成功したのに喜びに浸ることができない。まして勝利感を味わうということは、さらにできない。夕闇の迫りくる森の小径を谷に向って彼は降りる。その時彼は「悲しそうに」あたりを見渡しさえするのだ。彼は深く深く分け入り、彼の姿は最早見えず、足音は聞えない。あたりには静けさが漂うばかりである。そして Montague の死体は落ち葉の中に横たわっている。

さて、この Montague の死に際して、作者はその描写を彼が Tigg であった頃の、又、Jonas よりも優位にあった頃の Montague の、そして、Jonas を恐れ始めた Montague の描写とはかなり変えている。これが彼の二番目で最後の変化である。Tigg と優位にある Montague は、いささか滑稽な、しかし、何等の精神生活も持たず、単なる詐偽師の粹を出していない。最初の変化は Jonas を恐れるようになってからの Montague で、例えば自分以外の人間に愛情とは言えないまでも、心づかいを示したりし始めるところにある。しかし、これには多少の保身の念があったことは否めない。

二番目の変化が著しいのは、金銭を得ることを、人を騙してでも追求してきた彼が、Pecksniff との会談が成功しても、なぜか心が晴れないところである。そういう彼にある種の虚しささえ感じ取られる。死の直前の Montague を描写するのに、以前の彼を描く時には決して用いられなかったであろう、「悲しそうに」という人間的感情を示す副詞が、ごく自然に用いられているほど、彼は変っている。彼は最早、Tigg でも Montague でもない、何者かになり始めているかのようだ。

前回の殺人未遂事件の時のような自然界の狂暴さは無く、又、同じように Montague の心の中にも恐れはない。静かな夕暮に、静かに殺されていく Montague。苔むした小径を下り、やがて落ち葉の中

に血にまみれて横たわる死体。前回のように、微に入り細にわたって両者の心理的葛藤を描写することなく、また、殺人行為を直接描くことなく、実に明瞭に、殺されてゆく者と、殺す者とを描きわけている。

IV

Jonas が小径から飛び出して来る。この時から彼の心に恐れが生じる。それは必ずしも殺人に対する恐れ、その露見に対する恐れとは言い難い。それは、ちょうど、サインした文字が赤かったのを見た時の恐れと同種のものではないだろうか。自らが閉じ籠っていると信じられている部屋へこっそりと戻る途中、Jonas は不可解な思いに取りつかれる。Montague が死んで、あるバランスが崩れたのだろうか。

彼が森の中にいた時は、森に恐怖を感じていた。しかし森の外に出、罪を犯してしまっただけからは、彼の恐れは彼が閉めきって家に残してきた暗屋へと妙に転じていった。彼は森よりもその部屋にはるかに大きな恐怖を感じた。（47章）

これは、露見することへの恐れというよりは、むしろ自分自身への恐れと言えるだろう。この恐れと共存するのは、もし再びこういう状態になったら、自分は再び同じ行動をとるであろうという肯定の気持である。恐れ（否定的なもの）と肯定と、当然共存できにくいものが、Jonas の中で共存している。しかし、これは均衡を保っているというわけではない。常に崩れる危険をはらんだ、不安定な状態である。

合理主義的教育を受けて育ち、合理的に生活してきた Jonas の中にこのような葛藤を生み出した原因は、自らの父殺しの罪を隠蔽しようとする保身の欲求であると同時に、ごく人間的な感情、「憎悪」で

であることは興味深い。なぜなら、第二の殺人を犯す直接の動機となった父殺しの方は、憎しみから生じたものではなくて、“ある金額の動産を棺桶と呼ばれる特殊な金庫に入れ”ようとする単純な気持ちから生じたものなのであるから。

しかし、恐れはますますつのる。

彼はまるで自分の想像上の眠りを邪魔するのを恐れるかのよりに、つま先立って戸口に忍び寄った。．．．．．彼は、自分自身の心臓がベットの中で人殺し、人殺し、人殺しと鼓動するのを聞いた。どんな言葉が、このような恐しい真実を鮮かに浮びあがらせることができるだろうか！（４７章）

Jonas は死体が発見されることを恐れ、自分の部屋を恐れる。前者に対する恐れは自分自身の安全を願う気持ちから生じるものである。しかし、後者に対するものは、何が原因になっているのだろうか。自分の部屋を自らが一番くつろげる、自らのありのままの姿を示せる場所としたら、そこに見る自らの姿は邪悪な殺人者であり、それを知っている唯一の人間、自分自身を恐れたのであろうか。部屋に戻った時、ベットに寝ていたのは誰だったか。それもまた、彼自身であるとすれば、立ってベットを窺っているのは誰か。J. Hillis Miller は、実在する自分自身と、実在はしないが他の人々にすると信じられているために、実在する自分よりもずっと存在している感の強い自分自身（つまり、寝ている方の Jonas）との差が開きすぎ、Jonas は自己崩壊の過程を辿る⁽²⁾と、言っている。

一方では殺すのは当然と考え、他方では、その自分を恐れる。これまで一方のみの考えを受け入れることに慣れていた Jonas が、択一することのできない、相反する要素が構成する泥沼の中へ踏み込ん

で行くのである。

破滅は思いがけなく早くやって来た。叔父の Old Martin, 父の召使い Chuffy, Jonas に二種類の毒薬を与えた Lewsome 以下数名が, Jonas の父殺しの罪を告発しに来るのである。Jonas は露見したことに絶望し, もつれる舌で否定しようとするが, 納得されるはずもない。その時, Chuffy の話が始る。彼は老主人を敬愛していたので, よろよろの老軀に鞭打って Jonas を告発する。そして, その話によって恐るべき事実が明るみに出た。老主人は息子が自分を毒殺しようとしているのに気づいていた, というのである。その時, 息子を彼なりに愛していた老主人は, Chuffy にこのことを決して他言するな, 自分は息子を許す, と言ったという。次第に Jonas は希望を持ち始める。そして, とうとう父の死が, 自分の毒殺によるものではなくて, 息子が自分を殺そうとしていることを見抜いた父の, 悲しみのあまりの死であったことを聞いて, 彼は勝ち誇る。皆に出て行け, と叫び出す。ところが, そこに Nadgett が登場し, Montague 殺しが明るみに出された。Jonas には, もう言うこともなかった。絶望の果てに無気力になった Jonas の聴覚だけが働く。ちょうど, 人殺し, 人殺しとなる自分の心臓の音を聞いていた時と同じように。

通りの物音は人殺し, と繰返していた。残忍で恐ろしい人殺し。人殺し, 人殺し。家から家へとよどみなく鳴り続け, 石から石へと反響していった。ついには, その声は速くのがやがやという音の中に消え入ってしまった。そして, その音も同じ言葉をつぶやいているように思われた。(51章)

Montague は Nadgett に Jonas を見張るように命じていた

のだった。そして、その成果が彼が殺害されたことへの証明になったのだから皮肉なことだ。

親殺しを告発して来た人々と Nadgett が去り警官が残る。偶然にも、そのチーフは Chevy Slyme であった。ここで Jonas は最後の賭をする。Slyme に 100 ポンドつかませ、5 分間自分一人にすることを願うのである。金に負けて 5 分間の猶予を与えたものの、死なんとする Jonas を見て恐しくなったのであろうか、Slyme は 5 分後には、さらに時間をくれと乞う Jonas を拒み、馬車に乗せて連れて行く。

「止れ！毒をあおったぞ！この嫌な臭いは、奴の手の、このビンから臭っているんだ！」手はしっかりとそれを握っていた。全生命をかけた力で、死者が自らの勝ち得た賞杯をつかむような、硬直したつかみ方で。

彼らは彼を暗い道に引きずり下した。しかし、陪審員も裁判官も死刑執行人もそれ以上のことはできなかつたし、今や何もできなかつた。死、死、死。（51章）

Jonas は Uriah Heap のように刑によって罰されることなく、自殺した。Lowsome から、すぐに効く毒薬と、序々に効く毒薬の二種類を得ていたのだった。即効薬の方は自分のためのものだったのだろうか。

Jonas が Montague を殺害する直接の動機となった父殺しは、実は父のショック死であった。これは一種の悲劇といえるだろう。彼自身も自分が父を殺したと信じていたのだから。一度、父殺しを思い立ってからの Jonas は坂道を転げ落ちる雪だるまの如く、悪の坂道

を転げ落ちる。そして、その悪も次第に肥大していく。もちろん、最初の殺意は彼の精神から生れた一種の鬼子であった。そして、その鬼子が、彼の知らぬうちに彼にも制御できない怪物に成長し、彼自身がそれに支配されるに至ったという感がある。そこに、運命的なものに支配された、動きのとれなくなった人間を見出すことも可能である。彼はその坂道を下って、とうとうその死によるどん底にまで落ち込んで行くのだから。彼の為す悪がメロドラマティックであると評される⁽³⁾ 所以はこんなところにあるのだろう。自分の、父殺しを告発しに来た居並ぶ人々を面罵する場面においても、実はその言葉の裏に、自らの保身に汲々とする悲愴な気持が垣間見られる。実際は大それたことをするような人間ではなく、極めて小心な人間であったかのように。

金儲けという共通の目的を持った時、Montague と Jonas は互いに疑いつつもうまくいきそうに思われたが、その関係が、対等なものではなくなり始めた時、互いに牙をむきあわなければならなかった。そうしながらも互いに微妙な平衡を保ちつゝ増大し、その果てにMontague が死んでからは、バランスの取りようもなく、Jonas も破滅していく。作者の目は、そうした Jonas を冷酷に見放しているのではなく、そういう悪人も自己の保身のために汲々とする小心さを持ち合せていることを描くことによって、彼の破滅をより現実的なものにすることに成功している。

Notes

- (1) Steven Marcus; Dickens from Pckwick to Dombey, Chatto and Windus, 1965. P228
- (2) J. Hillis Miller; Charles Dickens; The World of His Novels, Indiana University Press, 1969. P. 126
- (3) Philip Collins; Dickens and Crime Macmillan & Co. Ltd. 1965. P276.